

イタリア語における否定表現

古 浦 敏 生

§ 1. は じ め に

今回の「広大言語」は、否定表現の特集号らしいので、何か書かねばなるまいと思い、日頃サボっているイタリア語（以下 *ital.* で示す）研究のつぐないのために、主として、G. Rohlfs: *Historische Grammatik der italienischen Sprache*, Band III, Bern, 1954 を参考にしながら、ペンを執った。

§ 2. 否定詞の形態

ラテン語（以下 *lat.* で示す）の否定詞 *non* は、そのまゝ、*ital.* でも *non* として受継がれている。このほか、*ital.* の否定詞には、*nessuno* (<*lat. ne ipse unus*) 「誰も……ない」；*niente*（語源不明），*nulla* (<*lat. nulla*) 「何も……ない」；*né … né …* (<*lat. nec … nec …*) 「…でもなく …でもない」；さらに、*né* に強めの副詞 *anche, meno. Pune* が付いた *neanche, nemmeno, neppure* 「…すら……ない」；等がある。また、*non* が強調されて語末の *-n* が落ちてできた *no* 「いいえ」がある。

ここでは、これらの否定詞すべてをくわしく説明するわけにはいかないので、*non* だけを取りあげてみよう。

non の *-n* は、次の子音と *assimilation* を起す場合がある。eg. *No llo senti.* (<*Non lo senti.*) 「君は、それを聞かない」。また、この *-n* は、母音で始まる語の前では長くなる場合がある。eg. *Questa nonn'è terra da conquistare.* 「これは、征服すべき土地ではない」。

また、*non* は、地方によつてやゝ異っている。eg. トスカナ方言（フィレンツェ付近）では *nun.*（この *nun* が短縮された）*un*；エミリア方言（ボローニャ付近）では *en, ne, n*；リグリア方言（ジェノバ付近）では *nu*；ベネト方言（ベネツィア付近）では *no*；南部方言（ナポリ、

カラブリア、シチリア) では *nun, nu, n', nna, un, u, etc.* ; となつている。

§ 3. 否定詞の用法

ここでは、いわゆる虚辞否定だけをとりあつかうことにしよう。

la.t. の恐れ表現の後に続く副文章では、その恐しいことが生じなければよいがという希望から、否定詞の *ne* が使われることは衆知の事実である。これと同じ現象は、古代 *ital.* (時代を正確に決めることはできないが、ダンテ、ペトラルカ、ボツカチオ等が生存していた頃だと考えればよからう) にも見られる。eg. *Temo che i Parenti suoi non la diano ad un altro.* 「私は、彼女の両親が彼女をほかの男に与えねばよいかと恐れている」。即ち、*temo* という恐れ表現の後に続く (接続詞 *che* 以下の) 副文章では、否定詞の *non* が現れている。

このような現象は、*dubitare* 「疑う」 *guardarsi* 「用心する」、*impedire* 「妨げる」、*negare* 「否定する」、*vietare* 「禁じる」等の後でも見られる。

現代 *ital.* では、この現象は必ずしも厳密であるとは云いきれない。即ち、上述の動詞の後に続く副文章では、*non* は、現れたり消えたりする。この所は、もう少し追究してみる必要がある。

§ 4. Fullwörter

否定を強調するために、いわゆる *Fullwörter* (以下 *F.* で示す) が役立っている。*F.* とはフランス語 (以下 *fr.* で示す) における *ne...Pas* の *Pas* の如きものを云う。この *F.* の発生であるが、恐らく eg. *Ich esse nicht eine Krume.* 「私はパンくず一つ食べない」のような文章がもとになつて、この *eine Krume* に相当する語が一般化され、ほかの動詞にも付けられるようになったことに依るのであろう。

すでに古代 *ital.* においても、*F.* は存在していた。eg. *Punto* (元来「点」の意) ; *mica* (又は *miga*) (元来「粉くず」の意) ; さらに、まれではあるが、*fiore* (元来「花」の意) , *guado* (元来「浅瀬」の意) etc. ここで文章の例も挙げておくと、eg. *Non dubito punto.* 「私は一寸も疑っていない」。けれども、これらは、否定を強める目的にのみ用いられたのであつて、現代 *fr.* の *Pas* とは異つている。

これに対して、現代 *ital.* の *F.* は、常に強めの意味を持つてゐるわけではない。eg. *Non sto punto bene.* 「私は身体の具合がよくない」。また、現代 *ital.* 諸方言では、上述

の古代ital.のFのほかに、foglia（元来「葉」の意）、goccia（元来「滴」の意）、brisa（元来「パンくず」の意）もFとして役立っている。さらにピエモンテ方言（トリノ付近）では、frのPas がPaとして入りこんでいる。このほか、否定詞とFとが一語になった例もある。eg. ピエモンテ方言nutta（<non+gutta「滴」）。

§ 5. Füllwörterの用法

古代ital.の例からわかるように、Fは、もともと、否定詞を強めるものであつた。けれども、それが使い古されてくると、強めの意味が薄れ、単なる飾りにすぎなくなつた。しかし、おもしろいことに、逆の現象も存在する。即ち、Fに否定詞の概念が移行し、ついに、Fだけで否定表現が行われる現象もある。現代fr民衆語では、pas がneを追いやつて、eg. Il vient pas. 「彼は来ない」という表現ができた。これと同じ現象が北イタリアにも起つている。eg. ロンバルディア方言（ミラノ付近）のCaPissi miga. 「私はわからない」。さらに、エミリア方言では、動詞の不定法の否定にもFが役立っている。eg. brisa rubar 「ぬすまないこと」。

§ 6. お わ り に

くだらないことをゴタゴタ述べたが、最後に、今後追究すればおもしろかろうと思われるテーマ（§ 3で述べたものは除いて）について一寸ふれておきたい。

私は、否定詞自体よりも、Fに興味を覚えた。つまり、「どんな語がFになりうるか？」という疑問が生じた。§ 4からわかるように、Fとしては、「点」、「粉くず」、「滴」などのような具体的名詞が、しかも、「小さなもの（最小単位）」、「つまらないもの」という概念を持つ語が現れやすいようである。これは『「小さなもの」を否定しておきさえすれば、「大きなもの」、「普通のもの」はもちろん否定できる』という意識、具体的に云うと、『eg「一步も歩けない」という文章において、「一步」という「小さなもの」を否定しておけば、「十歩」という「大きなもの」はもちろん否定できる』という意識、を利用して否定を強調しているのであろう。

しかし、（§ 4で現われた）「花」、「葉」、「浅瀬」は如何にしてFになつたのであろうか？ 上述の説では解明できそうもない。例をあげてみよう。eg. Ne Dio guarda fiore. 「神は一寸も見つめない」（<「神は花を見つめない」）。但し、これはGuittone という人の詩における例なので、韻の関係で、fioreを使つたのかもしれない。けれども、「葉」、「浅瀬」は（詩ではなく）フィレンツェの俗語でFとして用いられているので、「韻の関係であろう」としてすますわけにはいかない。

ここで結論が出せないのは残念であるが、どのように追究すればよいか、その方法だけでも考えてみよう。

(1) イタリア語に限らず、もつと広く、**F**の例を集めて整理してみる。

(2) 上述の **flore** 「花」, **foglia** 「葉」, **guado** 「浅瀬」 etc. の語を、それぞれ語源にさかのぼり、それらの意味変化の歴史を調べてみる。

諸者諸氏の御意見を賜りたい。

mhd の 否 定 表 現 (その1)

- ne (en) について -

岡 崎 忠 弘

ドイツ語史に於ける否定表現の型を簡単に示せば：

ahd. (750~1100) mhd (1100~1500) nhd. (1500~)

ni mac ne (en) mac niht mag nicht

となる。

mhd. では一般に本来の否定詞 **ne (en)** と否定補足語 **niht** とで否定は表示されるが、この両者の力関係を観察してゆくことが、この小論の目的である。他の諸言語に於けると同様にドイツ語にあつても、本来の否定詞 **ne (en)** は否定の補足語 **niht** と共存ののち、客分たる **niht** に駆逐され衰退への道を辿っている。Der Nibelunge Not (推定成立 1200 年頃) に於いては、或る時は **ne (en)** が、或る時は **niht** が脱落していて、必ずしも **ne (en) - niht** の原則型で否定が表わされていない〔(注) niht の脱落の可能又は必要な場合：①他の否定代名詞、否定副詞が存する時。niht は **ne (en)** とは併用されるが、これ以外の否定を表わす語とは併用されない。① **daheim, lekein, kein, weder** を含む文に於いて ② „weiter“ „etwas weiters“ の意の **ander, anders, mere, baz, fur baz** を含む文に於いて。usw. ne (en) の脱落の場合：① **en** が文頭にくる場合。② **niht** 及びその他の否定詞が動詞の前に立つ時、**en** は多く脱落する。〕